



ザ・ターニングポイント

会社発展の契機となった転換点を紐解く

長きにわたる企業の歴史のなかにはいくつもの転換点があります。異分野への事業展開、新しい取引先の獲得、技術開発によるブレイクスルー、あるいは苦境から脱した契機など、現在の発展につながった各社の「ターニングポイント」を紹介합니다。(この連載では創業から半世紀以上の会員企業にフォーカスします)

第7回

株式会社 九櫻

河内木綿を使った武道衣の製造を開始

大阪府八尾市を中心とした河内平野は、かつて綿の一大産地で「河内木綿」として全国にその名を知られていました。

創業者 早川幸三郎氏は、生誕の地・八尾市^{おんぢ}恩智で、河内木綿を紺に染めて販売する商店を営んでおり、武道具店などに売り歩いていました。裁縫が得意だった妻が、農作業に必要な野良着や袋物、雑貨類を縫い、月に3度お寺の境内で催されていた青空市でも商いをしていました。

1918(大正8)年、自分で剣道衣や剣道袴を縫って売ればよいのではないかと思立ち、ミシンを買って始めたのが創業のきっかけです。

創業当初は、剣道衣をメインにスタートしましたが、現在の主力製品である柔道衣も、独自の刺子織を用いて、一緒に作っていました。



創業者・早川幸三郎氏

早くから生地から縫製までの一貫生産体制を確立

当時の柔道衣は、手刺しが主流でしたが、幸三郎氏は、木製の織機やジャガード織機を使って柔道衣の縫製を開始しました。昭和初期には自動織機の導入や、ミシン工場の拡張も行い、時代の要求に応えるべく、生地の生産から縫製までの一貫生産体制を確立。1939年、早川武道具株式会社として会社組織にし、幸三郎氏の長男、重一氏が初代社長に就きました。

しかし、1945年の敗戦を機に、軍事色を一掃するということから武道は全面的に禁止されました。武道具を作ることをも一切禁止となり、木綿生地の在庫を使って学生のズックのカバンや、野球のグローブ等を製造し、事業を継続してきました。

1947年に武道具の生産の許可があり、早川繊維工業株式会社へと社名を改め、柔道のほか剣道、居合道、なぎなた、弓道などいろいろな道衣の生産を展開しました。



創業時の社屋

武道の再開により、柔道衣は学校の授業や警察関係で需要が高まり、警察・自衛隊の指定用品に認定されたことで販売を拡大していきました。

世界的な柔道の広まりにより輸出も好調で、売り上げの2割に達した時期もありました。

昭和40年代に入ると、本社を八尾市から大阪府柏原市に移転し、現在に至っています。

世界の「九櫻」ブランド誕生

同社のメインブランドである「九櫻」のマークは、1939年の株式会社創立と同時に誕生しました。

このマークは、初代社長の出生地、八尾の恩智に由来するものです。

話は14世紀中頃の南北朝時代にまでさかのぼります。後醍醐天皇の側近として活躍した楠木正成の家臣に、恩智左近という「忠君の武士」と称される武将がいました。左近が八尾に恩智城を築き、掲げていた紋所が九桜であったことにちなみ、「武」を連想させ、桜の国・日本を象徴するのにふさわしいとして社章としました。なお、恩智城跡は神社となっており、桜の名所として有名です。



九櫻マークは同社の登録商標



さくらの「S」を柔道着の帯をイメージして図案化
色は日の丸の赤

ローマ字で書くと普通は「KUZAKURA」というように「Z」になりますが、同社では「さくら」の頭文字「S」を用いて「KUSAKURA」としています。

Turning Point

柔道がオリンピックの正式種目に

1964年、第18回大会の東京オリンピックで、柔道が初のオリンピック種目になりました。このオリンピックにおいて、日本柔道選手団の柔道衣・帯、すべてに同社の商品が採用されました。

特に柔道衣すそ菱刺し子部分の機械化を発案したことで、ミシンでの刺し子は糸がほつれて競技に支障をきたすことが常態化していた中、この画期的な織りにより完成度が高まりました。この織りは、現在も世界のスタンダードとなっています。

さらに同時期、柔道衣の色を生成りから、晒し（ホワイト）への変更を同社が最初に手掛けました。

後に東京オリンピックでの金メダリストでIOC委員であったヘーシング氏の依頼により、カラー柔道衣の研究にも協力し、さまざまな色のサンプルを提出しました。現在、オリンピックをはじめとする国際試合では、ホワイトとブルーの柔道衣が用いられていることにつながっています。



新IJF規格認定柔道衣

左：主要国際大会、全柔道主催指定大会使用可

右：IJF主催国際大会用

柔道の世界大会では、IJF（国際柔道連盟）が認定したメーカーの柔道衣しか着用できません。この認定メーカーは、世界で合計11社しかなく、日本では同社を含めて2社、ヨーロッパに9社あります。その中でも九櫻だけが自社工場に織機を持っており、生地を織りあげ、裁断・縫製までの一貫した生産を行っています。

生地と縫製にこだわった 世界最高水準の柔道衣づくり

生地は独自の織り方で、肌触りの良さにもこだわっています。強度に関してはIJFの規定があるので、他社と差をつけるには着心地の部分が重要なポイントになります。国内外から高く評価されている理由は、その着心地の良さにあります。実際に着用しているユーザーの声を反映させ、細かい部分にまでこだわって作ることができるのは、一貫生産をしている同社の大きな強みです。

柔道衣の生地は一般の衣料品の生地よりも厚く、縫製の際の細かい作業がとても難しいものです。生地を1mm単位で綺麗に縫い合わせるのは、至難の業です。全日本柔道連盟や国際柔道連盟の服装規定で、袖や裾の長さなどが細かく決まっているうえ、綿の生地は洗うと縮んでしまいます。洗ってちょうどよい寸法になるように、“縮み”を考慮した寸法で作らなければなりません。着用した選手が服装規定に合わず試合に出られないことになる大変な問題になるので、仕上がり寸法はきっちりと管理しています。厳しい品質チェックをクリアし、選手のもとへ届けています。

また柔道衣とは違い「帯」は巾が細く、長いものには10～13本もの縫いを入れる技術が必要となっています。



職人による手縫い工程

身長、体重、性別、筋肉のつき方など人の体型は千差万別。一般的なサイズ表記でもある程度フィットするものは選べますが、一流のアスリートからは「よりフィットするものを」との声が多いことも事実です。こうしたニーズに応え、すべての人によりフィットする柔道衣を提供するべく独自開発したのが「Xシステム」です。

身長、体重を基本として、同社に蓄積されたデータを加味し、通常のサイズ表記にはとらわれないサイズ対応を可能にしました。フルオーダーに近いシステムでありながら、すばやく納品できる体制は、多くの選手から高評価を得ています。

アスリートを支える 技ありの心遣い 五輪で使える国際柔道連盟公認の畳

九櫻は畳にもこだわり、自社で製造しています。オリンピックで使用できる畳は、IJF（国際柔道連盟）公認のものに限られています。日本国内でIJF公認の畳を作れるのは九櫻のみ。特徴は、イグサを使わず、ポリプロピレンなどの素材を塩化ビニールで覆ったもの。海外製は単層なのに対し、9層もの多層構造になっています。そのため、体が強くたたきつけられても衝撃吸収がよく、痛みが和らぎます。しかも、海外製は足が滑りやすく、これまでも選手を悩ませてきましたが、九櫻の畳は滑りすぎずひっかかりすぎないと定評があります。

柔道用の常設設備から大会設営に必要な用品はすべて網羅。運営サポートにも対応しています。



IJF(国際柔道連盟)「公認畳」



グランドスラム東京会場(2014, 2015)

新ルール施行による新たな挑戦

リオデジャネイロオリンピックの開催（2016年）を前に、IJFは2015年4月に新ルールを施行しました。新ルールの一つとして、柔道衣に使われる生地について制限がかけられるようになりました。

従来通りの引っ張り強度は保ちつつ、生地を薄くして軽量化を図るというかなり厳しい要求内容でした。その難題を自社で生地を織れる工場があるという強みを活かし、研究と試験を繰り返し行うことで、世界で一番早く服装規定をクリアした柔道衣を作りあげることができました。検査機関のチェックに合格した同社の柔道衣はひと足早く、東京で開催された世界大会で選手に着用してもらうことができました。これらの実績が、同社のものづくりに対する自信につながっています。

創業100周年を機に社名を変更 魂を込めた柔道衣を世界へ

創業100年を迎えた2018年、社名を「株式会社九櫻」と改名しました。

高級柔道衣や公式試合の選手が着用する柔道衣は日本国内で、学校用の柔道衣は海外で作っています。もちろん海外で作ったものもすべて、国内の検査部できっちりと検品し、品質管理を徹底しています。2020年の東京オリンピック開催決定を機に、生産体制をさらに拡大させるべく、中国やベトナムといった外国人の雇用も本社工場で積極的に行っています。外国人雇用については、毎年定期的には、社長自ら現地に行って面接を実施しています。即戦力となる人材を雇用するために縫製テストなど、業務に直結した試験を行って採用しています。社員増員に伴い、今ある縫製工場だけでは手狭になるため、新たに第2工場を建設しました。また、子会社である早川縫製工業(株)を立ち上げたことで、外国人の採用枠も新たに増やすことができ、順調に人員を拡大し続けています。やはり企業は新しい人材を入れなければ活性化しません。

モノだけではなく、情報も企業にとっては大切な財産。同社では、「管理コントロールセンター」を置くことで、お客様の情報はもちろん、商品の企画・生産・物流まであらゆる情報を管理・共有しています。業務の効率化を図るとともに、お客様へ

の迅速な対応を実現しています。

昨今、「礼に始まり礼に終わる」とする武道精神は、人間形成の基調として注目され、健全な青少年育成に欠かせないと認識が高まっています。

今年（2024年）のオリンピック開催国、フランスでは柔道の競技人口が53万人を超え、日本の約4倍となっています。礼節を重んじる価値観は世界中に広がっていることがわかります。

こうしたなか、九櫻は世界が求める“MADE IN JAPAN”の品質の高さと信頼性を追求し、柔道衣を通して柔道の発展に寄与することを目標に掲げ、100年にわたって培ったものづくりの魂を、今後も世界に向けて広げていかれることでしょう。



本社社屋



株式会社 九櫻

<会社概要>

本社所在地	大阪府柏原市上市3-11-21
事業内容	柔道衣・製造・販売
創業	1918(大正7)年5月
資本金	7,930万円
従業員数	94名(2024年7月現在)



同社ホームページにリンクします▶